

名句が滑稽句に変身 ③

小林英昭

今回も名句を様々な滑稽句に変身させてみた。

名句 朝顔に釣瓶とられてもらひ水 千代女
こほろぎに尿瓶とられて厠まで

この名句はすでにこのままで滑稽句になっている。一方、滑稽句の方は、頻尿家には辛い話である。これからますますの高齢化社会、お仲間がどんどん増えてまいります。

名句 ラガー等のそのかち歌のみじかけれ 横山白虹
来賓のそのスピーチの長々と

来賓のテーブルスピーチの長いのには辟易する。会場がしらけているのもかまわず延延と続くのである。空気が読めないとはこのこと。まったく。

名句 銀河系のとある酒場のヒヤシンス 橋 閒石
薔薇荊のとある酒場はおかまバー

むかし、『薔薇荊』と言う名の雑誌があったと記憶する。いわゆる「男色」を好む人達の雑誌である。そんな人達の集まる酒場を「おかまバー」と言った。

名句 捕虫網買ひ父が先づ捕へらる 能村登四郎
蝶捕れずおとうとを追ふ捕虫網

名句はすでに滑稽句。滑稽句は捕虫網を買ってもらっていざ出陣をしたものの獲物は一匹も取れず、かわりに弟を追いかけてまわす兄の様子を描いた。

名句 まつくらな中に階段熱帯夜 吉田汀史
まつくらな中で怪談聞く夜涼

名句はどう読むべきか一筋縄ではいかない難解句である。滑稽句はシンプルに「階段」を「怪談」に「熱帯夜」を「夜涼」に替えてみた。名句をパロディ仕立てにするのが滑稽句をつくる第一歩かも。

名句 夏みかん酢っぱしいまさら純潔など 鈴木しづ子
夏みかん好きに純潔すててより

この句を詠んで忽然と姿を消した、鈴木しづ子の有名な句。それを滑稽句に。妊娠すると酸っぱいものを好むとか。男の自分には当然経験はないが…。

名句 鎌倉を驚かしたる余寒あり 高浜虚子
かまくらを脅かしたる暖冬異変

東北の冬の風物「かまくら」。せっかく子ども達で作った「かまくら」が、その後の暖冬異変に溶けてしまわないかとみんなが脅えている。「鎌倉」を「かまくら」にして擬人化してみた。

名句 蛤の舌出す闇の深さかな 真鍋呉夫
蛤の舌出す夜の厨かな

同じ情景を名句ではこう詠み、滑稽句ではこう詠んだと言う例。いや、名句には深い意味が隠されているようにも思う。滑稽句は単なる情景描写かな。

名句 湾曲し火傷し爆心地のマラソン 金子兜太
湾曲し上り下りし箱根路のマラソン

大御所金子兜太の句をいじくらせていただいた。毎年正月にテレビで観戦する箱根マラソンに改造してみた。兜太が生きてをれば、どうコメントするか。

名句 生も死もたかだか一字夕端居 宮澤映子
生も死もたかだか一度夕端居

一字の「字」を一度の「度」に変えただけ。でも句のニュアンスが変わる。

今回この試みに取り組んで感じたことは、名句はやはり名句であるということ。しかしながら、名句をああでもない、こうでもないといじり回すことによって、名句のもっているリズムや切れのありよう、季語の斡旋の仕方などが、自然と身に付いてくる感覚を味わうことができ、とても勉強になった。

*参照：角川学芸出版編「覚えておきたい極めつけの名句1000」